

# ノーサイド

—加害と被害を越えた論理の構築—

(1)

## 中村周平



私は 2009 年から 2 年間、応用人間科学研究科でお世話になりました。「応用人間科学研究科」で過ごした 2 年間は、私にとって修士論文をまとめるだけではなく、自分の人生を大きく変えてしまった出来事と向き合い、自分自身の考え方を変えていくための大切な時間でした。

応用に入った当初は、卒業研究のテーマを継続していきたくて思っていました。けれども、私はもう一つの「テーマ」を心の中に抱え込んでいました。

毎日楯円球を追いかけていた高校 2 年の秋、私はラグビーの練習中の事故で首の骨を折り、「頸髄損傷」という障害を負いました。その事故を境に、ご飯を食べたり風呂に入った

り…それまで自分一人でしていた何でもないことを誰かに頼まなくてはならない生活が突然やって来ました。また、私の「介護」が家族の生活の中心を占めることになり、両親は仕事を休まざるを得ない状況に陥りました。ただ事故当初、自分の事故は偶発的に起きた「特別なもの」だと考えていました。「ラグビーに怪我はツキモノ。でも、これだけ大きな事故っていうのはあんまりないんだらうな、周りではほとんど聞いたことなかったし…」。しかし、事故後、これは決して「あるラグーマンだけ」に起きた不幸な話ではないということを知りました。

日本国内のラグビー事故において、過去20年間(1989～2008)で360件、年間平均20件近くもの重症事故が起きている現状があります。2003年度に「重症事故対策特別委員会(現安全対策推進委員会)」が立ち上げられたものの、その数に減少の兆しは見えていません。

「こんなこと、二度と繰り返しちゃいけない」。いつしか自分の人生を大きく変えてしまったこの事故のことを考えていきたいと思うようになりました。しかし、事故の原因究明や補償をめぐる学校側と調停などを重ねていく中で「これ以上『スポーツ事故』について触れたくない、これ以上周りの人からいろいろ思われるようなことはしたくない」という思いから、修士論文として深めるには抵抗がありました。誰かに恨まれるかもしれないという不安を抱きながら書かなければならないテーマよりも、ある程度の経験や裏付けもあり、何より批判されることの少ないテーマを無意識のうちに選んでいたのかもしれない。

自分の事故にそんな後ろめたさを持っていた私が、「スポーツ事故」をテーマに研究を進められたのは、家族クラスターの先生方や研究仲間をはじめ、多くの人たちに支えていただいたからだと思っています。「スポーツ事故に加害者はいない」と訴えながらも、自分の事故を文中で「悲劇」と表現していたこと。事故を一つでも減らしたいと考えおこなっていた「当事者からの情報発信」が「被害者感情」のしがらみによって相手に反省を求める姿勢になってしまったことで、ラグビー部の指導陣や学校との間に大きな溝を作ってしまったこと。家族クラスターの先生方はそのことを直接伝えるのではなく、研究を進めていく中で自ら気づき、感じ取っていくことを尊重してくださいました。逃げるのではなく、しっかりと自分の過去と向き合い今を見つめ直すことの大切さを身を持って感じることができました。そして、「被害者の中村周平」ではなく「いちラグビー部のOB」として、かつての指導者やコーチと関係を築き直すきっかけを掴むことができました。

スポーツ事故に遭った人や、その家族からの情報発信はスポーツ事故を無くしていくためには不可欠なものです。しかし、それだけでは十分なものとは言えないのではないのでしょうか。本来なら事故の「当事者」である人たちの中に、部活の指導者や学校の存在が抜け落ちていると考えます。しかし、日本独自の慣習や司法の制度的な要因によって、事故にあった本人や家族と、指導者や学校とが歩み寄れない現状が存在しています。この現状を克服し、相互の関係を修復することができないか。そして、スポーツにおける事故を少しでも減らしていけるよう共に行動を起こしていけないか。「被害者感情」とらわれ、「補

償」や「再発防止」の観点からしか事故と向き合えなかった自分が、「修士論文」というものを通して、そのような考えや視点を持てるようになっていった心境の変化や支えてくださった方々との出会いについて、事故が起きる前(私が一日中楯円球を追いかけていたころ)まで遡り、時間軸に沿って書き出していきたいと思います。

確かに事故は私や家族の生活を変えてしまった、一瞬の間に起きた「出来事」でした。ただ、私自身は今でもラグビーは素晴らしいスポーツであると思っています。ラグビーというスポーツを通して様々な経験をさせてもらったことや、かけがえのない仲間に出会えたことに心から感謝しています。そのラグビーで年間約 20 件もの重症事故が起き続けている事実を、ただの「出来事」として見過ごすことはできませんでした。この「情報発信」を通して私は、「ラグビーは危ない。事故に遭うとこんな不幸になる」ということを伝えたいのではなく、事故後、本当なら同じ「当事者」として事故に向き合っただけで済んだ、かつての指導者の方々と今一度歩み寄り、ラグビーがより安全なスポーツになっていくことを共に考えていきたい、私が訴えていきたい強い思いです。

## ～私と「ラグビー」～

今回は、事故に遭うまでの私の過去について触れていきたくと思います。運動に対して苦手意識を持っていた自分を変えるべく、スポーツを始めようと考えていた中学時代。その中で、ラグビーというスポーツと出会い、徐々にその魅力に取り込まれていきました。これは当事者研究ですが、自ら過去を振り返り記述していく方法では、自分の過去について客観的に「語る」ということが十分にできませんでした。自己語りの「手記」のようなものになってしまったのです。そのため、同じクラスターに所属する北村真也さんに協力していただき、「私へのインタビュー」をお願いしました。この方は、私のことをよく理解していただいている研究仲間であり、普段から相手の考えや思いを何気ない会話を通して、引き出してくださる方でした。方法はインタビューを通して私の過去に遡り、その当時の心境を私が北村さんに「語る」という方法を計 4 回おこないました。インタビューをしていただき、目の前の人に「語る」という形を取れたことで、自ら過去を振り返るだけ

では書ききれなかったことを、引き出していただくことができました。そのとき交わされた会話の内容を手がかりに、私の心境を書き出していきたくと思います。

以下、表記は筆者=S、北村さん(インタビュアー)=I とする。

### 1 偶然の出会い

小さい頃から、決してスポーツが得意な方ではありませんでした。それに加え、週 1 回の水泳教室を辞め、家でダラダラと過ごす時間が増えたことで、体重もそれに比例してドンドン増えていきました。小学校の卒業アルバムには「海パンの上にお肉が乗っていた体」がはっきりと写っています。「動けない自分」「運動音痴な自分」、クラブ活動で文化系に入っていたことも「運動なんかできるはずがない」と決めつけているところがあったのかも知れません。

I: 「ってことは中学 1 年から、ラグビーを始めたわけ？」

S: 「そうなんですよ。ホントはスポーツすっ

ごい苦手な方で」

I: 「そうなん!?(中略)っていうことは結構太ってたん?」

S: 「太ってました。だからそれが自分の中でもいかなんかと思いつつ止められずにいたのが、中学校を一つの機会として、何か運動部に入りたいと…」

そんな弱い自分を変えたいと考え、「何がなんでも運動ができる部活に入ろう」という決意を持って中学校に入学しました。

いくつかの部活を体験し、入部届けの期日 2 日前の朝、部活名の欄に「バレー部」と書いて学校に向かいました。小学校からの友人が多かったという安易な理由からでした。「学校の帰りにでも出して帰ろう」そう思っていた矢先、知り合いの同級生に廊下で声をかけられました。そして、なぜかラグビー部の監督室に連れていかれ、監督から話を聞くことになってしまったのです。話しているだけで背筋がピンと伸びる、そのような印象を受ける方でした。緊張のため、会話の中身はほとんどわかりませんでした。唯一「明日待ってるからな」という言葉だけは今でも鮮明に憶えています。

S: 「(監督から)『明日待ってるからな』って。それで『あぁどうしよう』ってなったんですけど、断れんようになって、結局バレー部って書いたのを消して、ラグビー部って書きなおして、学校に出したんです」

I: 「へえー、それがきっかけやったんや」

S: 「そうなんです」

I: 「べつにラグビーがしたかったわけでもなく?」

S: 「断れずに」

予期せぬタイミングではありましたが、それは本当に厳しくて、やりがいのある「ラグビー」というスポーツとの出会いでした。

初めて知るスポーツ、しかも本格的な運動経験がなかった私にとって、練習は想像を絶するものでした。寝ても覚めても、練習の毎日。疲労で食べ物がのどを通らないという体験は生まれて初めてでした。

「海パンの上にお肉が乗っていた体」は、夏を迎え

る頃には肋が見え始めていました。また、ラグビーを始めたことによる「変化」は心理的な面にも顕著に現れていました。小さい頃から人見知りや激しく、初めて会う人には挨拶どころか、目を合わすことも難しかったのですが、部活では先生や先輩に挨拶しないことはタブーだったため、その部分に関しては入部当初から徹底的に指導されました。「人に会えば反射的に頭を下げる」、最初は怒られないために嫌々していたことでしたが、しっかりと挨拶すれば相手の方がしっかり返事を返してくれる、それが当たり前になると、逆に挨拶しないことの方が不自然に感じるようになりました。私の中で、何かが変わり始めていました。

ラグビーに関しては、入部当初、様々なことで悩みを抱えていました。一つは体の小ささです。140センチ程の身長は、お世辞にもラグビー向きとは言えず、スクラムを組むと体の大きい選手に囲まれ、私一人だけ、頭一つ「抜け落ちている」ように感じてなりません。当然、そのことは試合や練習中、体と体がぶつかる際にも大きく影響していて、当たり負け(相手と当たった際、負けて押されてしまうこと)することも度々ありました。もう一つは、「スポーツをすること」における「経験」の少なさです。中学時代の監督は全日本でのプレー経験もあり、京都の中学ラグビーでも名の通った指導者だったのですが、私はそれを入部してから知りました。チームメイトは、その監督のもとでラグビーがしたいと越境してきた人間が半分を占めていて、小さい頃からラグビーに関わる環境で過ごしていました。その他のメンバーもサッカー経験者など、体を動かすことを苦手とする人間はほとんどいませんでした。かたや、私は「何か運動できる部活に入れれば」という気持ちで入った人間です。ラグビーということより「体を動かす」という点だけでも、絶対的なスキルの違いがあることは明らかでした。練習にはついていくことがやっと、試合ではミスを連発してチームに迷惑を掛けることも多かったです。しかし、辞めたいと思ったことは一度もありませんでした。

I: 「もうやめようかなって思わへんかったん?」

S:「最初は何かすごい、しんどくてもう…。しんどいし行きたくないなって思った時はあったんですけど、辞めようと思った時は一回もなかったですね、中学校のときは。なんでかな…楽しかった。小学校のとき文化系で、あのコンピュータクラブとか将棋部とか、そんなんしかやったことなかったんが、初めてチームプレーって言うんですかね。集団でやるスポーツに本格的に参加して、なんか、それでできた集団って自分にとって新鮮で。あまり当時の記憶があれなんですけど、でも辞めたいと思ったことは中学校の時、一回もなかったですね。」

そして、学年が上がるごとに試合に出させてもらえる機会も多くなり、少しずつラグビーというスポーツが理解できるようになっていきました。そうなるラグビーをしていることがおもしろくなってきます。今まで、つらいだけだった練習や試合が徐々に楽しくなり、そして、気が付くとラグビーというスポーツに完全に魅せられていました。

S:「中学校の時ですか…そうですね、あの中1中2の時は、ホンマについて行くだけでいっぱいいっぱい。みんなはドンドン上手くなっていくのに、自分だけ、全然ついていけないのが、はずかしかったこともあって。なんかそのころは、みんな続けてるし、自分も続けてられたんかなってぐらいやっと思ったんですけど。自分らのチームになったぐらいから、ちょっとずつ試合にも出させてもらえるようになって、ラグビーっていうスポーツがちょっとずつ分かり始めたというか。今までなんかこう、とりあえず、飛んできたボールのどこに向かって走り込んでるだけやったのが、だんだんこう定跡じゃないけど、こうなったらこうなるんや、ちょっとずつやったんですけど…」

I:「なるほど。こう分かってきたわけやな、そこらへんの」

S:「はい」

歓声が全く気にならなくなるほどの試合前の緊張感、大人数でボールを奪い合うチームプレーの迫力。試

合の勝ち負け以上に、ラグビーの持つ醍醐味や楽しさを、身を持って経験することができました。それまでルールも知らず、見たことさえなかったものの虜になっていたのです。毎日、体中泥々になりながらも中学校生活の大半をラグビーに費やしている自分がそこにはいました。

## 2 継続の意志

「365日」ラグビーという充実した中学校生活。ただそれも、中学までとっていました。3年間ラグビーを続けてきたことに私自身大きな達成感を感じていまし、高校ラグビーで通用するほど、決して上手いプレイヤーではないことを自覚していたこともありました。そんな中迎えた11月の近畿大会。チームは勝ち進み、準決勝で大阪府代表の啓光学園中学と対戦することとなりました。結果は惨敗、これが中学ラグビーの最後の試合となり…。

S:「関西では一番高いレベルで近畿大会っていうのが最後なんですけど。そこでベスト4までいって…僕の中で楽しかったけど、このラグビーも中学校3年間やって終わりかなと。もういいかなと」

I:「なるほど、これでもう卒業やと俺のラグビー人生はと」

S:「とと思ってたんです。でも、近畿大会の準決勝で負けたときに、なんかこう、これで終わっちゃうのかなっていう、初めてその時に、すごく面白くなってきてるのに、ちょうどラグビーが。だからこう自分の中で区切り付けなあかと中学校で辞めるつもりでいたのが、なんかもったいないなというか、これもうちょっと続けてたらもっとわかってきて面白くなるんちゃうかなっていうのが出てきて…」

しかし、試合が終わったとき、私の中にはすでにある気持ちが芽生え始めていたのです。「ラグビーをもう少しやりたい」という継続の気持ちが。